

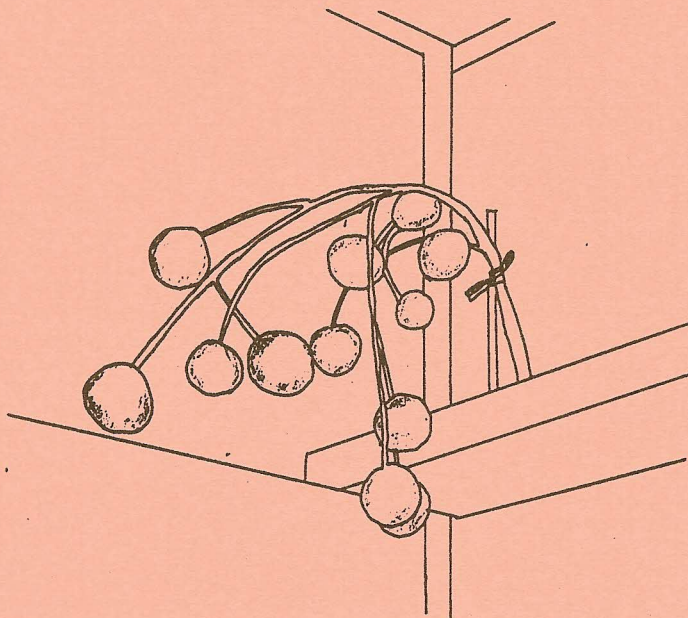
宮代町郷土資料館

平成8年度企画展

# みやしろの お正月

～祝いと願い～

展示解説



まゆ玉団子

期間 平成8年12月11日(水)～平成9年1月26日(日)

## 開催にあたって

過去から連綿と、口から口へ、手から手へと伝えられてきた「暮らしの中のならわし」は、昭和30年代後半の高度成長期を境に、急速に消えつつあります。しかし、ものがあふれ、季節感の希薄な時代になっても、お正月のためのさまざまな準備や、それを待つうきうきとした気持ちは、変わっていないように感じられます。

年中行事が数多く行われるお正月、宮代町の農家ではどのように過ごしていたのでしょうか。

宮代町郷土資料館では、平成8年度企画展「みやしろのお正月～祝いと願い～」を開催いたします。この展示では、大正月と小正月を中心に、まゆ玉団子などの、みやしろの正月行事に関するものを展示します。特に、現在では行われなくなった小正月のハナや、お供え物の器などは、町民の皆様にご協力いただき、再現して展示することができました。

また、展示期間中に、体験学習講座として「ハナとまゆ玉団子づくり」を実施します。その機会に小正月の供え物づくりを体験していただくことができます。

宮代町内の、伝統のお正月をご覧ください、郷土宮代の文化への関心や理解を深めていただければ、幸いに存じます。

平成8年12月11日

宮代町郷土資料館



## 大正月と小正月

<sup>おおそうじ</sup>  
大掃除、正月の準備と、あわただしい年の暮れを過ぎ、新年を迎えると、不思議とあらたまった心持ちになります。新しい一年の始まりであるお正月を宮代の農家では、昔からどのような行事があったのでしょうか。

<sup>ねんちゆうぎようじ おこな</sup>  
年中行事の行われ方を見ると、二つの正月があることが分かります。ひとつは年の始めの元日を中心とする「大正月」です。大正月は、<sup>としがみ</sup>年神様を迎えてまつる行事です。そして、もうひとつの正月が「小正月」です。小正月は、1月14・15日を中心とした行事です。これは古くは月の満ち欠けで月日をはかっていたころの暦の名残りと考えられています。この暦では満月を第1日としたので、満月の15日を新年として祝ったものとされています。

## 暦の移り変わり

現在のように、正月を1月1日に行うようになるまでに、<sup>きゆうれき つき</sup>旧暦から月遅れ、<sup>しんれき</sup>新暦と移り変わりました。

明治5年に、それまでの<sup>たいいんれき はいし</sup>太陰暦を廃止し、<sup>たいようれき</sup>太陽暦に改めるという「改暦の布告」が出されました。このときから、新暦ができたわけですが、いままでの旧暦の正月が、その時から新暦で行われるようになったのではなく、月遅れ、つまり2月に行われるようになったのです。

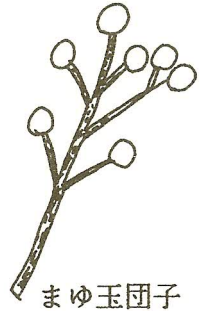
そして現在のように新暦で正月を行うようになったのは、昭和30年代ころでした。

昭和32年に埼玉県教育委員会が実施した調査では、「県東部の北埼玉・埼玉葛地方で月遅れで正月を行っているところがある」と報告されており、宮代でも「昭和30年代の初めまで2月に正月をした」という家が多くあります。その理由として、そのころまで、<sup>のうぎよう きかい</sup>農業が機械化されておらず、新暦の1月ではまだ農作業や屋敷まわりの整理が残っていて、正月の準備ができなかったのが、その理由といわれています。

## 宮代の正月行事

町内の農家の年中行事は家々によって様々に伝承されていますが、概略は下記のようになっています。

	月 日	行事名	内 容
大 正 月	1月1～3日	正月	年男が初湯に入り、身を清めてから 正月の供え物などを上げる。
		初もうで	近所の社寺に参拝する。
	1月4日～	オオバン ヨリビ	年始のあいさつに、親戚が集まる。 (家ごとに日が決まっていた。)
	1月7日	七草オジヤ 七草粥	粥に餅・大根・人参・ごぼうなどを 入れて食べる。
	1月11日	鍬入れ	農家の仕事はじめて、畑を鍬でさく る。
小 正 月	1月14日	まゆ玉団子	まゆ玉団子を作って供える。
		※オニタマ	仏様にオニタマを供える。
		ハナカキ	ハナを作って堆肥場に立てる。
	1月15日	小豆粥	小豆粥を作り、まゆ玉団子を入れて 食べる。
	1月16日	小豆飯	小豆飯を炊いて食べる。
	1月20日	恵比須講	恵比須・大黒様にご飯、尾頭つきの 魚、けんちん汁、カケブナ等を供え る。
		※オソナエクズシ	お供えをくずして、雑煮にして食べ る。



まゆ玉団子



ハナ

※オニタマの行事は大みそかや盆の8月14日に行う家もあります。

※「お供えは、14日のまゆ玉団子と交替に下げる」という家もあります。

# 大正月

大正月は元日を中心として行われ、年神様を迎えてまつる行事が多いことが特徴です。

## 年神様

年神様は正月だけ、まつられる神様です。神様のくる時期は、大みそかや元旦の朝、帰る日は1月の卯の日・卯の刻、14日など、さまざまに言い伝えられています。

年神様をまつる場所は、町内では古くは年神棚としがみだなを設けましたが、現在では、床の間や、大神宮様だいじんぐうさまと一緒にまつる家が多いようです。

供えるものは、お供えや雑煮ぞうじなどです。家の主人や跡取りが年男としおとことなつて、元日の朝、初湯はつゆに入って身を清めてから、雑煮を作つて供えました。そのほか、年神様には松の枝も供えました。これは、11日の鉤入れに使いました。

年神様は家を守り、幸福をもたらす神様であり、また、年神様のトシとこもつは、穀物の実りを意味する「稔とし」に通じることから、豊作ほうさくをもたらす神と信じられてきました。

## 正月の餅

お正月の食べ物、お供え物というと真っ先に思い浮かぶものが、餅もちです。家々では12月25日過ぎになると、お供え（鏡餅）や、雑煮に入れる餅をつきます。正月には、正月用の餅のほか、あられやかき餅にする餅もついたので、1俵から多い家では3俵（1俵は60kg）もつきました。そのため、午前2時ごろからもち米をふかし始め、家族総出で、近所も手伝つて餅をつきました。

12月29日につく「クンチモチ（九日餅）」や12月31日につく「イチヤモチ（一夜餅）」を嫌うところも多く見られます。

餅は正月以外にも、初誕生はつたんじょう（1歳の誕生日）のイッシュウモチ（一升餅）など、人生よしめの節目の祝いに用いられることが多く、生命に力を与え



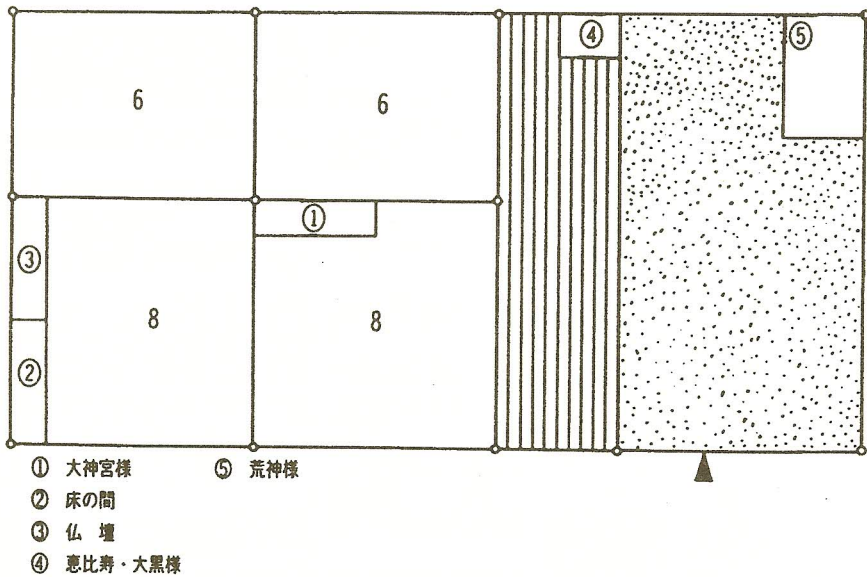
る霊力のある食べ物として、考えられています。

### お供え（鏡餅）

お供えは半紙にのせ、年神様のほか、家の神様や仏様に供えます。一般的には大神宮様・荒神様・恵比須様・井戸神様・仏様・俵神様・屋敷神様などにお供えします。

餅つきのお供えは三白め、五白めにつく家が多いです。一白めは白が冷えていて上手につきあがらないためです。

1月20日（恵比須講）はオソナエクズシで、お供えを下げて焼いたり、雑煮にして食べました。



一般的な農家の間取りと神様の配置

## 餅なし正月

「正月に餅を用いない」というところが、日本各地に見られます。  
 このようなならわしを民俗学では「餅なし正月」といいます。餅なし正月には「正月は餅を供えない、食べない」、「正月は餅を供えるが、食べない」などの種類があります。

宮代町内のいくつかの農家では、現在でも「餅なし正月」を行っています。

「餅なし正月の理由」については残念ながら各家とも、言い伝え等は残っていません。

家	期間	食べ物	供え物	お供え・その他
A家	三が日	朝 そば 夜 ご飯	朝 そば 夜 ご飯 これを家の神様 すべてに供える	・お供えは大神宮様・恵比須様・仏様に供えた。 ・4日から雑煮を食べた。
B家	三が日	朝 赤飯 夜 ご飯	朝 赤飯 夜 ご飯 これを家の神様 すべてに供える	・お供えは家の神様すべてに供えた。 ・4日から雑煮を食べた。
C家	三が日	朝 赤飯 夜 ご飯	朝 赤飯 夜 ご飯 これを家の神様 すべてに供える	・お供えはしなかった。 ・年末の餅つきもしなかった。 ・4日から雑煮を食べた。
D家	元日	朝 ご飯 夜 ご飯	朝 ご飯 夜 ご飯 これを家の神様 すべてに供える	・お供えは家の神様すべてに供えた。 ・2日から雑煮を食べた。

## 正月の供え物の器

正月には、年神様や大神宮様などの神様や仏様にいろいろな供え物をします。以前はそれは、正月だけに用いられる器に入れて供えました。

### カミノゼン

ヘゲッカワ（<sup>きようぎ</sup>経木）でできた器で、年末に荒物屋などから購入し、家の神仏に供えました。ある農家では三が日はご飯を供え、その後は器を下げ洗ってから、七草粥を供えたそうです。そして、正月が過ぎると燃やしました。

### カミサマノゼン（神様の膳）

ワラでできた器で、家の主人が年末に作ったものです。これを家の神仏の数だけ作り、それぞれをヨシで作った台にのせます。この器も正月が過ぎると、屋敷の後ろの畑で燃やしたそうです。

---

## 鉦入れ（くわいれ）

1月11日には鉦入れをします。鉦入れとは、農家の仕事はじめの儀礼で、早朝、その家の主人が鉦で畑を三うねうないます。

その方法は家々によって少しずつ違いますが、畑に持って行くものは一般的には年神様に供えた松の枝とオサゴ一升、角餅二切れなどです。畑ではアキノカタ（その年の<sup>えと</sup>干支によって定められている、もっとも良いとされる方角）に向いて、三うねさくります。そこへ、オサゴをまき、松の枝をさします。残ったオサゴは、昼に炊いて家族で食べたり、14日のオニタマやあずきがゆに入れて食べました。

鉦入れは農家の仕事はじめですが、これは来るべき季節にはじまる農作業の豊作を祈って、<sup>こうき</sup>耕起と<sup>たねま</sup>種蒔きの<sup>しよま</sup>所作をするものです。

実際に冬の農作業が始まるのは、小正月を過ぎた17日ころからでした。



## 小正月

1月14・15日に行われる行事を小正月といいます。

日本各地で行われる小正月には、いくつかの形式があります。

①作物の豊作を前もって祝う行事…例えばまゆ玉団子・ハナカキなど

②作物の豊作・凶作きようさく うらなを占う行事かゆうら…例えば粥占など

③火を燃して病気や災難を除こうとする行事…例えばドンド焼など

④扮装をした青年などが、家々を訪れる行事…例えばナマハゲなど

宮代町の農家では、作物の豊作を前もって祝う行事、まゆ玉団子やハナカキが多く行われていました。これらの行事は、植物の彩いろどりが少ない季節はなに華やかな雰囲気をかもしだすものでもあります。

### まゆ玉団子

まゆ玉団子は、枝に団子をさしたものです。あたかも豊かな米の実りをあらわすかのように作られたものですが、本来は、木や藁わらで作ったマブシかいこに蚕かいこがまゆを作った様子をあらわしたものです。このように「まゆ玉団子」は、養蚕ようさんと結び付いた行事といえます。

まゆ玉団子は1月14日に作り、供えます。屋敷内やしきないに生えている柳やなぎやけやきなどの枝を取ってきて、団子をさします。養蚕をしていたころは、団子をまゆの形にしてさしました。さし終わると家の中の神様に供えます。家によっては年神様に大きい団子を12個さしたものをお供えするところがあります。一年が12か月であるからだそうです。

まゆ玉団子を供える時に、それまで供えてあったお供えを下ろすという家もあります。

まゆ玉団子は下げて15日の朝のあずきがゆに入れたり、砂糖醤油さとうじょうゆのイビリ団子にして食べました。

## ハナカキ

ハナはニワトコなどの枝の表皮をハナカキなどでけずって、巻き上げたものです。これを堆肥場たいひばにさしたり、家の神仏ひょうぶに供えます。この行事は、花が咲くように、今年も豊作でありますようにとの願いをこめたものです。

堆肥場のハナは、一番大きなもので、竹を四つ割りにして、その先にハナをつけたものです。

ハナの作り方は家によっても異なり、それぞれに美しさがあります。



## オニタマ

ハナカキ

町内の小正月の行事の中に、オニタマ（オミタマ）という行事があります。これは、仏様（仏壇）にオニタマという、ご飯をにぎってウツギなどの枝をさしたものを12～16個供えるものです。正月行事の中にあって、仏様だけに供えものをするこの行事は、性質が異なるものと考えられます。

しかし、町内のある農家では、このオニタマにさしたウツギの枝を抜いたときに、その年の作物の出来を占うといいます。つまり、たくさんご飯がついてくると綿がたくさんとれる、ついてこないと不作である、ということです。これは、小正月に行われる、「作物の豊作・凶作を占う行事」であり、二つの習俗が複合ふくごうされた状態ということができるといえるでしょう。

## 協力者名簿

今回の展示につきまして、昔からのならわしを教えてください、現在では行われなくなったハナや、お供え物の器などを作ってくださいました方々は下記のとおりです。

心よりお礼申し上げます。(五十音順 敬称略)

青木佐太	青木かね	秋谷敏子	秋谷善弘
秋谷ミツ	石橋清一	石橋とき	小島京子
鈴木まさ	知久勇	中村薫子	中村多計志
浜田幹一	蛭間直江		
故 中村もん	故 浜田ゆき	故 福島アサ	

---

このパンフレットは、町史編集委員板垣時夫氏のご指導および資料館職員の協力を得て、中村啓子が作成しました。

宮代町教育委員会（郷土資料館）では、町内に伝わるさまざまな言い伝えを、町民の皆様にお聞きして本にまとめる事業を行っています。

この展示をご覧になってのご意見、ご感想や、みなさまのお宅に伝わる正月行事などについて、ぜひお教えてください。どうぞよろしく願い申し上げます。

---

企画展「みやしろのお正月～祝いと願い～」

発行年月日 平成8年12月11日

編集発行 宮代町郷土資料館

〒345 埼玉県南埼玉郡宮代町西原289番地

☎0480-34-8882